

Veda 文献における *sam-sarj/srj* の語義について

笠 松 直

1. 動詞 *sam-sarj/srj* は、多くの場合 Akk. + Instr. をとって「[～を～と] 一つにする、結び合わせる、一緒にする」を意味する：RV I 110,8b *sám vatsénāsṛjatā mātáram púnah* 「[君たちは] 仔牛と母 [牛] を再び一緒にした」¹⁾；RV X 85, 29c *enā pátyā tan_vvám sám sṛjasva* 「[君は] この夫と [自分の] 身体を一つにせよ」(Med., possessiv-reflexiv). 文脈上明らかな場合、Akk. 乃至 Instr. が明示されないこともある：AVŚ III 14,1 *sám vo goṣṭhena suśádā sám rayyá sám súbhūtyā | áharjātasya yán náma ténā vah sám sṛjāmasi || 2a sám vah sṛjat_v aryamā* 「君たちを座り心地のよい牛舎と、財産と、繁栄と、[良き] 日に生まれた者の (に与えられる) 名²⁾ であるもの、それと君たちを [我々は] 一緒にする (それらを与える). Aryaman は君たちを [goṣṭha 等と] 一緒にせよ」；AVŚ VI 5,2abc *indremám pratarám kṛdhi. sajātānām asad vaśí. | rāyás pōṣeṇa sám sṛja* 「Indra よ、[君は] この者を前方へ置け、[彼は] 生まれを共にする者たちの支配権者であるがよい、[彼を] 財産の栄えと一緒にせよ」. Medium の機能に隠れることもある：MS II 4,2:39, 20^p *súrām ná pibati. pāpmānā nét samśrjā iti* 「[バラモンは] スラー酒を飲まない、悪と [自分自身を]、私は」一緒ににしないように (samśrjāi, Konj.), と考えて」(Med., direkt-reflexiv).

2. 辞書は以下の如き Akk. のみをとる用例をも挙げている (「(2つ以上の Akk.) を一緒にする、集め合わせる」)：MS I 10,17:157,15^p *yát tátra juhuvád āhutiḥ sámśrjet. samádaṃ kuryād* 「もしそこ (Āhavanīya-) に [祖霊への献供を] 献供するなら、[人は、神々と祖霊とに対する] 諸献供を一緒にして (混ぜ合わせて) しまうことになる。争い (samád-) をつくることとなろう」；ŚBM V 1,2,17 *néj jyótiś ca támaś ca samśrjāvétí* 「光と闇とを、[我々二人は] 一緒ににしないように、と考えて」；TB I 7,1,3 *sò 'bravīt. | ká idám turíyam iti. | ahám ítíndro 'bravīt. | sám tú sṛjāvahā iti. | táu sámśrjetām. | ...* 「彼 (Agni) は言った：『この第 4 の部分を、誰が [我が物とする]』³⁾ のか」と、「私が」と Indra は言った、『だが、[我々両名は、[お互いを] 結び合おう (手を結ぼう)』と [Indra は言った]. その両名は結び合った」(Med., reziprok

「[お互いを] 結び合わす」「結び合う」)。しかしこの場合、用例を整理し語義を吟味しなおす余地があるように思われる。本稿は一部の理解し難い用例、疑問の余地ある複合語の語義の解明に資そうとするものである。

2.2. 以下の例の場合、Akk. Sg. は集め合わされた結果を示す *resultativer Akk.* と解釈される (Pass. の例では Nom.) : AVP (-Or., -Kashm.) XVI 61,7ab *ka idam asthi sam asṛjata ka idam māmśam sam abharat. ...* 8ab *brahmāsthi sam asṛjata brahma māmśam sam abharat* 「誰がこの骨を集め合わせたのか。誰がこの肉を集めたのか。…brahman (n.) が骨を集め合わせた。brahman が肉を集めた」; ChU I 1,6 *tad etan mithunam om ity etasminn akṣare saṁsṛjyate* 「その際、このひと番い (*rc-* と *sāman-* 乃至 *vāc-* と *prāṇa-*) は、om という、この音節の中に結合される」 (Passiv)。

2.3. 牧畜に関わる文脈においては「(個々の家畜・動物群を) 集め合わせる」を意味する: MS IV 2,10:33,1ff.^p *sām vaḥ sṛjat_v aryamā sām +pūṣā sām bṛhaspātih | ... iti gāḥ samsṛjed yā asya purā syūr yāś cānyāto vindēta* 「『Aryaman は君たちを集め合わせよ。… (～ AVŚ III 14,2-3)』と [唱えて]、牛たちを集め合わせるべきだ、それらが以前は当人のものであり、かつ、それらを他のところで見出すとしたら」; KS VII 8:69,17ff.^p *ye ca vai grāmyāḥ paśavo ye cāranyās ta ubhaye naktam saṁsṛjyante. tasmād api ye 'lpāḥ paśavas te naktam bahava iva dṛśyante* 「村落に属する家畜たち (仔牛たち) と、荒野に属する [家畜] たち (牛たち) と、それら両者は、夜の間、一緒にされるのだ。それ故に、家畜たちは少数であっても、夜には沢山 [いる] ように見える」; KS XI 2:145,9f.^p *yat saṁsṛṣṭam. paśavo vai saṁsṛṣṭam. paśūn evāvarundhe* 「混和物 (*saṁsṛṣṭa-*) が [用いられる] ならば、一集め合わされた (*saṁsṛṣṭa-*) ものは、家畜たちなのだ、他ならぬ家畜たちを囲い込むことになる」 (VAdj.)⁴⁾。

2.4. 戦さの文脈においては家畜を戦利品として集め合わせる意味で用いられる: RV X 27,10 *ātréd u me māmsase satyám uktām¹ dvipāc ca yac cātuspāt saṁsṛjāni | strībhir yó ātra vīṣaṇam pṛtanyād¹ áyuddho asya ví bhajāni vedaḥ ||* 「一方、まさしくこの時、私 (インドラ) によって言われたことを、本当であると、君は思うことになる、[即ち] 二本足のものと、四本足のものを、私が寄せ集めることになる、ということ。この際、女たちと共に、雄牛 (インドラ=話し手) に、戦をしかけるものがあれば、この者の財産を、戦わずして、私は (他の者たちに) 分け与えよう」 (堂山訳⁵⁾)。RV X 84,7 の *saṁsṛṣṭa- dhāna-* は「(戦利品として) 寄せ集められた財産」を意味し (上掲 KS XI 2:145,9f.^p をも参照)、*mahāddhanāsya saṁsṛji-* は恐らく「大なる戦利品の集め合わせ (の場)」を意味しよう⁶⁾: RV X 84,7 *saṁsṛṣṭam dhānam*

ubháyaṃ samākṛtam | *asmábhyaṃ dattāṃ váruṇaś ca manyúh* | *krátvā no manyo sahā medyē dhi* | *mahādhanásya puruhūta saṁsr̥jji* || 「集め合わされ (*saṁsr̥jsta-*)、寄せ集められた (*samākṛta-*)⁷⁾ 財産を二つながら我々に与えよ、Varuṇa と Manyu は、精神力とともに、[君は] 我々の、Manyu よ、盟友 (*medin-*) として共にあれ、大いなる財産の集め合わせ (*samsr̥j-*) において、何度も呼びかけられる者よ」.

2.5. PW は、ŚvetUp 以降、*saṁ-srj* が「～を創出する (*schaffen*)」の語義を持つと述べる⁸⁾。しかし上述 2.3-4 を考慮すると、別の訳が可能と思われる：ŚvetU III 2cd *pratyañ janāṁs tiṣṭhati saṁcukocāntakāle saṁsr̥jya viśvā bhuvanāni gopāḥ* 「唯一者 Rudra は」個々の人々に⁹⁾ 向かって立っている。[彼は] 終わりの時には、縮こまっている¹⁰⁾、守護者として、全存在たちを集め合わせた後に」。これは牧畜上の語法を背景とし、家畜の守護者 (*gopā-*) たる唯一神 (Rudra) が家畜たる全存在を集め合わせることを述べるものと考えられる¹¹⁾。

3. 女性行為名詞 *yūdha-* 「戦、戦争」¹²⁾ の Pl. *yūdhas* を Akk. に取る例が見られる：AVŚ X 10,24ab *yūdha ékaḥ sām sr̥jati yó asyā éka id vaśí* 「ただ一人で彼女 (*vaśā* 雌牛) を支配する、[彼は] 唯一、戦たちを (*yūdhas*)¹³⁾ 集め合わす (集約する)」；RV X 103,3 *sá iṣuhastaiḥ sá niṣaṅgibhir vaśí* | *sāmsraṣṭā sá yūdha indro gaṇéna* | *saṁsr̥jajīt somapā bāhuśardhy* | *ùgrādhannvā prātihitābhir āstā* || 「彼は、矢を手にする者たちと共に [ある]。彼は、支配権者であり、箠を持つ者たちと共に [ある]。彼、Indra は、部隊を率いて、戦たちを集め合わす者 (*sāmsraṣṭar-*) である。saṁsr̥jajīt- であり、Soma を飲む、腕を誇示し、恐ろしい弓を持つ [Indra] は、つがえた [矢] たちを放つ者である」¹⁴⁾ (= AVŚ XIX 13,4 ~ AVP VII 4,4)。用例は以上に挙げたもののみで、解釈は困難であるが、諸々の戦闘をひとつに集約し、最終決着をなすことを意味するものかも知れない。saṁsr̥jajīt- の語義は、*dhanajīt-* 「財産 (戦利品) を勝ち得る」や RV X 84,7 *sāmsr̥jsta- dhāna-* 「集め合わされた財産 (戦利品)」と関係して「集め合わされた (戦利品) を勝ち取る」と思われるが、*sāmsraṣṭar-* と関連して「集め合わされた [最終戦] に勝利する」の可能性も否定し難い¹⁵⁾。

4. 単数中性代名詞 *tāt* のみをとる例が見られる：MS IV 5,9:76,17ff.^p *tē 'bruvan. yatamó naḥ prathamā r̥dhnavát* + *tān naḥ sahēti. tēsām vai makhā ārdhnót. +tān nyākāmayata. +tān ná sāmasyata* 「彼ら (神々) は言った：『我々のうち、最初に成功することになる者があれば、それ (*tāt* 恐らく *iṣṭāpūrtā-*) は共通に、我々のものとして [あれ]』¹⁶⁾ と。彼らのうち、Makha が成功したのだ。[彼は] それを自分 (のものとしようと) 望んだ。それを集め合わせ (供出し) なかった (*sāmasyata*)」。ここには構文

の変化による一定の意味展開が認められよう。背後には Akk.+Instr. 構文「(共有財産として、自分の物を皆の物と) 集め合わせる、一緒にする」(→ 1.) が想定されよう。単数の「それ (*tái*)」のみを提出して、集め合わせるべき Instr. を欠く場合、事実としては一方的に「それ (*tái*)」を差し出す、「(皆のために、自分の物を) 供出する」こととなる。

- 1) Cf. *apa-ā-kar/kṛ* 「(群れから一部の牛を／母牛から仔牛を) 引き離す」。用例は西村直子 博士論文 (東北大学 2002), 159ff. を参照。例えば MS I 4,5:52,14^p *purā vatsānām apākartor dāmpatī aśniyātām* 「仔牛たちを [母牛から] 引き離すまでは、家長夫妻は食事してよい」
- 2) 「縁起の良い」名。詳細は BLOOMFIELD, SBE XLII 351 を参照。
- 3) *idam bhū* 構文と解した。K. HOFFMANN, “Ved. *idam bhū*” Aufs. II 557ff. を参照。
- 4) KS XI 2:145,6ff.^p は家畜を求める者の為の Kāmya Iṣṭi を規定する。献供には酸乳・蜜・グリタ・炒り米・脱穀米と一緒にし (混和し) たもの (*samsṛṣṭa-*) を用いる。
- 5) 堂山英次郎「リグヴェーダにおける 1 人称接統法の研究」『大阪大学大学院文学研究科紀要』45-2, 2005 年, 278f. GELDNER も *samsṛjāni* は *dvipāc ca yāc cātuspāt* のみを支配すると理解する。GRAßMANN は当箇所を Akk.+Instr. (*sribhiḥ*) 構文と登録する。
- 6) SCARLATA, Wurzelkomposita, 627f. を参照。この際、(広い意味での) 家畜たちは戦利品 *dhāna-* の重要な部分をなしたものである。
- 7) *sam-ā-kar/kṛ* は「(家畜を) 寄せ集める、取りまとめる」を意味する: RV III 36,5b *samācakre vṛṣabhāḥ kāvyena* 「[Indra は] 雄牛として、見者たる力によって [自らの許に、雌牛たちを] 寄せ集めた」; AB V 14,6 *taṁ svar yanto 'bruvann. etat te brāhmaṇa sahasram iti. tad enaṁ samākurvāṇam puruṣaḥ kṛṣṇaśavāsy uttarata upotthāyābravit* ... [彼 (Nābhānediṣṭha Mānava) に、彼ら (Aṅgiras たち) は太陽光へ進み行きつつ、言った:『祭官よ、この千 [の牛] が君のものだ』と、それを当の者 (N.M.) が [我が物として] 寄せ集めていると (*tad enaṁ samākurvāṇam*)、黒味がかった服を着た人間 (恐らく Rudra) が、北から近付き立って言った。
- 8) *sārga-*, *visarga-*, m. 「創造」に基く解釈である。その際、*sam* の意味は「(物を、正しい構成に) 集め合わせる」と理解することも可能である。RAU (後述) を除くこれまでの諸訳者は PW の見解に従う。例えば OBERLIES 訳: Zur Endzeit zieht der Hüter, den Menschen zugewandt, alle Welten ein, nachdem er [sic zuvor] geschaffen hat. (“Die Śvetāśvatara-Upa- niṣad. Edition und Übersetzung von Adhyāya II - III” WZKS 40 (1996), 140).
- 9) v.l. *janās*. 語形の議論については OBERLIES, op. cit. 137 n.70 (類似の句 II 16d への注); 139 n.84 を参照。
- 10) WERBA 340, s.v. は Vollstufe 語幹を持つ Pf. は Transitive であるとするが、寧ろ自動詞と理解すべきと思われる。BuddhaCarita XIII 54c *munir na tatṛāsa. na saṁcukoca* 「聖者は恐れなかった。縮み上がらなかった」; MBhār VIII 35,31 *pratāpyamāṇaṁ sūryeṇa¹ bhīmena ca mahātmanā | tava sainyaṁ saṁcukoca¹ carma vahnigataṁ yathā ||* 「太陽に、そして大いな

る自己を持つ Bhīma に苦しめられている君の軍隊は縮こまった、火の上にある皮革のように」。他動詞の如く思われる用例は Rām V 1,32d *caraṇau samcukoca ca* 「そして彼は両脚を縮めた」；V 56,57c *samkucyorū* 「(Sītā は) 両腿を縮めて」のみ。ŚvetU III 2c は韻律上異例な点があり、これまで幾つか訂正が試みられた。OBERLIES, op. cit. 139 n.84 を参照。RAU は *samcukoca* を除き、*samsrjya* を einziehen と訳す：Nach Westen zu den Menschen gewandt, steht er zur Endzeit da, wenn er alle Wesen einzieht, [nachdem er während die Schöpfung dauerte, ihr] Wächter [war]。 (RAU, AsS 17 (1964), 33)。

- 11) RV X 25,6 に類似の表現が見られる：*paśūm naḥ soma rakṣasi | purutrā viṣṭhitam jagat | samākṛṇoṣi jīvāse vi vo māde | viśvā sampāśyan bhūvanā vi vakṣase ||* 「Soma よ、[君は] 我々の家畜を守っている、[即ち] 様々なところに分かれ立って（散らばって）いる、動くものを。生きるために、[君は] 寄せ集める…、全存在を、総覧しつつ…」、上掲注 7 を参照。難解な Vimada-Refrain (... *vi vo māde ... vi vakṣase*) については KIEHNLE, Vedisch ukṣ und ukṣ/vakṣ, Wiesbaden 1979, 179ff. を参照。
- 12) *yūdḥ-* は原則的に、Veda 期を通じて女性行為者名詞と理解すべきである：MS II 10,4:135,13^m *sāmsrṣṭāsu yuts, v indro gaṇeṣu* | 「Indra は、集め合わされた戦争たちの中に、諸部隊の中に [ある]」(～ RV X 103,3)。
- 13) WHITNEY は、上掲 AVS X 10,24 の他 VII 81,3, XIX 13,3-4 (～ RV X 103,2-3) において *yūdḥ-*, Pl. を (恐らく Ep. に用例のある男性行為者名詞と理解して) *fighters* と訳すが、何れも *fight* の訳が可能：AV VII 81,3a *sōmasyāṁśo yudhām pate* 「戦さたちの主人たる Soma の織維よ」。但し AVP XIX 34,15d (-Or., -Kashm.) *mā riṣan samare yudhaḥ ||* 「戦士たちは戦争において傷つくな」の例は男性行為者名詞と理解される。
- 14) ほぼ TICHY に従った (Die Nomina agentis auf -tar- im Vedischen, 310)。なお彼女は *sam-sarj* に白兵戦 Handgemenge の意味を想定している。関係箇所のみ TICHY 訳を挙げる：... Er, Indra, ist dafür bekannt, daß er mit seiner Schar die Kämpfe(!) handgemein werden läßt; daß er Handgemenge gewinnt, Soma trinkt, mit den Armen seine Stärke zeigt。
- 15) SCARLATA, op. cit., 159 及び上掲 TICHY 訳を参照。
- 16) 定型句 *tāt ... sahā* (± *asat/astu*) については、K. SAKAMOTO(-AMANO), Diss.420 n. 1643 及び 636 に記述がある。動詞としては *astu* 乃至 *asat* が補われる：TS II 4,1,1f.^p *té rāk-sāmsy upāmantrayanta. tāny abruvann: vāraṃ vṛṇāmahai. yāt || 1 || āsurān jāyāma tān naḥ sahāśad iti* 「それら (Rakṣas たち) は話しかけた：『我々は] 選択を選択しよう。Asura たちに勝利する場合には、それ (*tāt*) は共通に我々のものであるがよい』と」(～ KS X 7:132,14f.^p)；TS V 2,3,3^p *āstv evā nau sahā yajniyam* 「祭式に適うものは共通に、我々二人のものであれ」。 *tāt* が指す中身は文脈による：MS II 1,4:5,10^p *yatamām naḥ prathamām yāsa ṛcchāt *tān naḥ sahā* 「我々二人のうち、先に名声に到達することになる者があれば、それ (*yāsa-*) は共通に、我々のものとして [あれ]」。

〈キーワード〉 *sam-sarj/srj*, *sāmsrṣṭa-*, Vedic, Śvetāśvatara-Upaniṣad.

(東北大学大学院)

Prof. Hojun Nagasaki as the chief. A new relationship between Orissa and Japan is expected to be explored from the research of this manuscript.

158. The Uses of *átas* and *átra* in the Maitrāyaṇī Saṃhitā

Kyoko AMANO

The Vedic pronominal adverbs *átas* and *átra* have often been assigned to the paradigm of *idám*, the pronoun of proximal deixis. It is not possible, however, always to understand them in the sense of ‘from here’ and ‘here’. The Vedic pronominal system is constituted by three pronouns of contextual reference (*sá-/tá*, *eṣá-/etá-*, *ena-/a-*) and two pronouns that refer to space (proximal *idám*, distal *adás*). The adverbs *tátas* and *tátra* belong to the paradigm of *sá-tá-*; *itás* and *iha* to that of *idám*; *amútas* and *amútra* to that of *adás*. But *eṣá-/etá-* and *ena-/a-* are without formally corresponding ablative and locative adverbs. On the other hand, *átas* and *átra* must have their proper place somewhere in the pronominal system.

A survey of all the 61 examples for *átas* (26) and *átra* (35) in the Maitrāyaṇī Saṃhitā has led to the following result: The sentences including *átas* and *átra* often play the same role as the sentences with the ‘anamnesic’ pronoun *eṣá-/etá-*. Typically, they give the reason of a contextually evident ritual act. In many *átra* examples (26 of 35), no preceding noun is found to which the adverb could refer, and a meaning ‘in this (ritual) situation (evident from the context)’ is strongly suggested. One example of *átas* refers to something that is not explicitly mentioned by a preceding noun, but can be understood from the context. This particular usage is reminiscent of the way in which *ena-/a-* is used. This usage will be discussed as a case of ‘anaphoric-associative’ reference.

159. On the Meaning of *sam-sarj/srj* in the Vedic Literature

Sunao KASAMATSU

Little attention has been paid to the meaning of *sam-sarj/srj* when the

verb is used with the accusative only. But there are a few points that should be considered.

In the context of stock farming or war, *saṁ-sarj/srj* governing only the accusative means ‘to gather cattle (as booty)’ [MS IV 2,10:33,1ff^p.; RV X 27,10]. The meaning of *sāmsṛṣṭa-* *dhāna-* and *saṁsrj-* in RV X 84,7 should be understood in this sense. PW assumes the meaning of ‘*schaffen*’ in ŚvetU III 2. But it can be translated as ‘to gather (all beings).’

In the RV and AV, *saṁ-sarj/srj* with *yúdhas*, pl. acc. fem. of *yúdh-* ‘war’ is found. *Yúdhas saṁ-sarj/srj* ‘to get wars together’ can be understood as ‘to bring wars to a conclusion.’

Sam-sarj/srj takes only sg. acc. *tát* in MS IV 5,9:77,7^p + *tán ná sámasṛjata*. The meaning is a little altered: ‘He didn’t deliver it (i.e. his own acquisition) up.’

160. The Mantras for Praying for the Security of Grazing Cows in the *Yajurveda* and the *Ṛgveda* VI 28,7

Naoko NISHIMURA

The first chapter of the *Yajurveda-Saṁhitās* (YS) consists of the mantra collections for *iṣṭi*, the fundamental of which is practically to be understood as the new and full moon sacrifice (Darśapūrṇamāsa). Every YS has the section 《Grazing》 as its opening. This is the ritual procedures of the so called Upavasatha day, the preceding day of chief offerings are made. There was probably not an exclusive place for the pasture, but the grazing land seems to have been *áranya-* (a wilderness), the place where no one has his own claim.

In this paper, I examine closely the four mantras in this section and the correspondent brāhmaṇas. The mantras are recited for the safety and fertility of the cow grazing in *aranya*. Comparing the mantras with *Ṛgveda* VI 28,7, which has parallel phrases, we can see an aspect of the nomadic life and trace its change in the Aryan society. It enables us also to confirm how the YV texts were gradually produced and codified.